

2026 年度

2/1 入学試験

国 語

注 意

1. 試験開始の合図があるまで、この冊子の中を見てはいけません。
2. 放送の指示にしたがって、問題冊子に受験番号・氏名を記入します。
次に、解答用紙の指定された場所にQRコードシールをはり、受験番号・氏名を記入します。
3. 試験時間は 45 分です。
4. 問題は、1 ページから 17 ページまで印刷してあります。試験が始まったら最初に確認し、足りないページがあったら申し出てください。
5. 答えはすべて解答用紙に記入してください。
6. 試験が終わった後、問題冊子・解答用紙とも回収します。
7. 記述問題では、指定された字数の 8 割以上は書いてください。ぬき出し問題では、指定された字数で答えてください。どちらの場合も、句読点やかぎかっこなどの記号も字数にふくまれます。

共立女子中学校

受 験 番 号	氏 名
A	

1 次の1～8の――線をつけたカタカナを漢字で、漢字の読みをひらがなで書きなさい。

1 将来は国際法をセンモンに研究していきたい。

2 彼の発言は上司のサシガネだろう。

3 ハイボクを認めたことが成長につながったようだ。

4 兄は甲子園でトウダにわたって活躍した。

5 彼女は共にたたかうメイユウである。

6 バザーで得た利益を折半する。

7 毛糸でマフラーを編む。

8 この道路を直進すると八王子に至る。

2 次の1～5のことわざ・慣用句について、（ ）にあてはまることばを後のア～クからそれぞれ一つ選び、記号で書きなさい。

1 破（ ）の勢い

2 （ ）に風

3 泥中^{でいちゆう}の（ ）

4 （ ）にうぐいす

5 （ ）を明かす

ア 種

イ 花

ウ 実

エ 蓮^{はす}

オ 柳^{やなぎ}

カ 松

キ 竹

ク 梅

3 次の詩を読み、下の問いに答えなさい。

青い鳥たち

おおさき さやか
大崎 清夏

わたしが歌うためには
まだ辞書に載^のっていない

① 言葉が必要でした

それは新しい言葉

わたしの言葉でした

もちろん知っていました

言葉に^{注1} 所有格を付ける行為^{こうい}の

^{注2} 稚拙^{ちせつ}さも 恥^はずかしさも

それでも必要でした

わたしが歌うためには

わたしが生きるためには

1 線①「言葉」とありますが、どういうことですか。ここでの意味としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 誰も知らない「言葉」

イ 誰もが共感できる「言葉」

ウ 「わたし」の思い

エ 「誰か」の歌

オ 「わたし」が受け取った心

2 線②「ある日誰かが造ったはずです——/たとえば『言葉』という言葉も」

とありますが、ここからどのようなことが読み取れますか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア かつて「言葉」を造るという行動は、誰しもがおこなっていたことであるから、

今を生きる「わたし」がその行為にあこがれるのも当然だ。

イ 「言葉」は何かを伝えるために造られたものであり、「わたし」が「言葉」を

生み出すのも自然な行動だと分かっている。

ウ 何もないところから何かの必要性をもって「言葉」を生み出した「誰か」に

対して「わたし」は尊敬の念をいだいており、その圧倒的な力を再認識^{さいにんしき}している。

エ これまでなかった「言葉」を生み出そうとしている「わたし」が、どれほど

大変な思いをしているかということも多くの人に知ってほしい。

オ 「わたし」が「言葉」を生み出すのは、「わたし」の孤独^{こどく}な気持ちをなぐさめ

るためであり、そんな自分の悲しみを少しでもうたったえたい。

② ある日誰かが造ったはずです——
たとえば「言葉」という言葉も

わたしの手でそのかたちを造ること
この小さな手と頭とで造りあげ
舌でさわって確かめること

わたしが歌うためには
わたしが生きるためには

青い鳥たちと わたしと

④ そのころは たいして違わないと
わたしは信じているのです

(『暗闇に手をひらく』リトルモアによる)

注1 所有格 Ⅱ それが誰のものを示すことば、「わたしの」など
注2 稚拙さ Ⅱ おさなくて下手であること

3 —線③「舌でさわって確かめること」とは、どうすることですか。その説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア ロに入れて味わうということ
イ ロずさんでひびきを調べるということ
ウ 声に出して音の高さや低さを楽しむということ
エ 声に出して聞きやすいか聞きわめるとのこと
オ 歌いながら広めるということ

4 —線④「そのころ」とありますが、どういうことですか。その説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 自分らしくあるということを伝えたいという気持ち
イ 誰かに自分を見つけてほしいという気持ち
ウ 幸せを見つけないという気持ち
エ 幸せがどこにあると信じる気持ち
オ いくつか理想の自分になりたいと願う気持ち

5 この詩について述べた次の会話を読み、詩の内容にふさわしくないものを一つ選び、記号で書きなさい。

ア 共子…「わたし」が歌うことは、生きることなんだね。
イ 立子…自分の「言葉」を生み出すことで、自身のうぬぼれや未熟さをさらすことになるかもしれないわ。でも、「わたし」は歌うのね。
ウ 共子…第三連は、誰もが「言葉」を生み出すということを強調しているのかな。
エ 立子…第四連でもう一度、「歌う」、「生きる」とあるから、「わたし」は「言葉」を生み出すことについて迷いがあるのかしら。
オ 共子…「青い鳥たち」は、「わたし」、そしてこれまで「言葉」をつむいできたすべてのひとたちのことだと感じるね。

4 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

木曜日。珍しく咲子ちゃんが給食前に登校してきた。

四時間目は国語だったけど、教科書すら広げずに、^①頬杖をついて、窓の外を見てる。

咲子ちゃん、本当に実行するつもりなのかな。素知らぬ顔して、私に声をかけることもしないけど。

私の方は、朝から心臓がドキドキして、小刻みに手が震えるのがわかるくらいだ。

本当にやるんだろうか。まさか嘘^{うそ}つてことないよね。実は冗談^{じやうだん}でした、みたいな。冗談^{じやうだん}だったらしいな。^②本当はやりたくない。でも、うまくいけば……いや、だけど……、頭の中を考えがぐるぐる回る。

四時間目の終わりを告げるチャイムが鳴った。みんなが給食の準備をし始める。咲子ちゃんがこっちを見る。私はぐくりと唾^{つば}を飲む。

いつものように列になり、おかずやご飯を受け取って、席に着く。

そして、「いただきます」の後。

咲子ちゃんはいきなり、お盆^{ぼん}を手に立ち上がり、ずかずか食缶^{しょっかん}に近づいた。

そして、まだいっさい手をつけていない状態の給食を、食缶^{しょっかん}に戻し始める。

まずご飯。それから、おかずにお味噌汁……全部残さず、丸ごと。

教室のみんなは、ポカンと驚いた顔で、それを見ている。
「え、遠藤^{えんどう}さん、何してるの？」

あつけにとられていた朝野先生が、あるとき夢から醒めたように駆け寄った。

「返したんです。あたし、給食食べたくないので」

咲子ちゃんは、あつけらかんとして答えた。

「な、何言ってるの！」

「箸^{はし}をつけちゃったら、食べなきゃいけなくなるでしょ。まだ触^{さわ}ってないから、汚^{きた}くないですよ」

「そういう話じゃありません。少しも食べずに全部返すなんて……！」

朝野先生が^③きやんきやん言ってる間、教室には^④そひそ声が飛び交った。

「何あれ」

「何考えてんの？」

「目立ちたいんでしょ」

^⑤咲子ちゃんは今もと不登校気味だし、^注エキセントリックな子だと思われてるから、みんなすぐ冷たい。

でも、咲子ちゃんは、まったく気にせずに。

堂々と胸を張って、言った。

「前から思ってたんですけど、給食って変じゃないですか？
なんでみんなて同じもの食べなきゃいけないんですか？
あたしたち、食べたくないんですけど」

「……あたし『たち』？」

朝野先生が聞き返した。

私は、呼吸が浅くなってくるのを感じながら、でも勇気を
出して、立ち上がる。

⑤教室のざわめきが、止まった。

「葵」

「小林？」

紗衣ちゃんやコツペくんの声がしたけど、振り返らない。

「こ、小林さんまで！ どうしちゃったの？」

朝野先生が慌てている。

私は震える手でお盆を持って、ゆっくりと食缶の前まで進
み出た。

「あ、あの……」

顔は真っ赤になってるだろうし、背中には汗がたらだら流
れてるのがわかる。

心臓はバクバクして、口から飛び出そう。

でも、言わなきゃ。

「私、小食で……いつも、給食、多すぎて食べられないんです」
言い出したはいいいけど、どんどん声が小さくなる。

「その、好き嫌いとかじゃないんだって、わかってほしく
て……」

必死に絞り出した言葉は、ほとんど無声音になっていた。

朝野先生は、困った様子で腕を組んだ。

「そりゃ、小林さんがいつも頑張って給食を食べてるのは、
先生も知ってるけどね……」

「でもさー、完食月間なんだよ」

先生の言葉を遮るように、誰かがそう言った。

「自分だけ食べたくないなんて、自己中じゃない？」

「ただのわがままでしょ」

「ずるい」

次々に、言葉の矢が飛んでくる。

「大変なのはわかるけど、食事に苦手意識を持つのはよくな
いよ。案外食べられることもあるかもしれないし、少しだけ
頑張れないかな」

朝野先生が諭すように言った。そういうことじゃ全然ない
のに。

⑥。

クラスの声は、どんどん大きくなる。

私はお盆を握ったまま、ぎゅっと目をつむった。耳の裏に
まで、汗が流れる。

怖い。怖い。やっぱり、こんなことしなきゃよかった。保
健室で頑張って食べてる方がよっぽどマシだった……。

だけ。

「私も食べられませんけど」

そこで、スツと手をあげた子がいた。

「え……」

ぶくつとした浅黒い顔と、黒目がちな目。頭には、灰色の
ま2ヒジャブを巻いている。

ラマワティちゃんだ。

みんな、「あ」って顔をした。

ラマワティちゃんはインドネシア人で、^{注3}ムスリムだ。

イスラム教では、^{注4}戒律で、口にしちゃいけないものが決まっている。豚肉とか、アルコールとか。だから、ラマワティちゃんは、給食のメニューが食べられないものの日は、家からお弁当を持ってくる。

イスラム教徒でも食べられるおかず。えーっと、たしか、ハラルってやつ。

今日の給食のメインは、豚の生姜焼き。

ラマワティちゃんは、もちろん食べない。【A】

「私は食べなくてもよくて、小林さんは食べなきゃダメなんですか？」

「えっと……」

朝野先生は、答えられない。

誰も、答えられない。

教室が一気にしんとまった。

「じゃあさ」

沈黙を破ったのは、コッペくんだった。

「遠藤と小林の分、おれがもらってもいい？」

「何言ってるの、コッペ。そういうことじゃないでしょ」

朝野先生は呆れ顔でたしなめる。

「え、そういうことでしょ？ みんな同じだけ食べなきゃいけないって、たしかに変じやん。人によって食べたい量は違うのにさ」

コッペくんは珍しく真面目だったけど、

「コッペがいっぱい食べたいだけだろ」

と、すぐに茶化されてしまう。【B】

「てか、もう食べていいですか？ 時間ないし」

「ほんとそれ。食べたくないなら好きにすればいいけど、クラスを巻きこまないで」

教室の雰囲気はまたとげとげしくなった。

まあ当然だ。みんなは給食、食べたいんだから。

ラマワティちゃんもコッペくんも、私をかばおうとしてくれた。

でも私は、なんかもう情けなくて、泣き出してしまいそう。

【C】

「あ、あの、ごめんなさい。もういいです。大丈夫……食べみたいです」

逃げるようにそう言って、お盆を持って席に戻ろうとするけど。

「おい、葵」

咲子ちゃんが、私の腕をぎゅつと掴んだ。

怒ってる。

「何？ チキってんだよ。返すって決めたなら返せよ」

大きな黒い目が燃えている。【D】

「食べたくないんだろ。返しなよ」

「さ、咲子ちゃん。やめて。離して」

でも、咲子ちゃんは私の腕を離さない。

もみ合いになる。

「遠藤さんやめなさい」

「おい、やめろよ、遠藤！」

朝野先生とコッペくんの声が重なった、そのとき。

「あっ！」

咲子ちゃんが私を押して、その勢いで私のお盆がひっくり返って、そして、

びちゃっ！

次の瞬間、生ぬるい衝撃を感じた。【E】

気づけば私は、頭からつま先まで、豚の生姜焼きとキャベツサラダと、お味噌汁まみれになっていた。

「うわ、もったいねえ」

と、コッペくんがつぶやいた。

（天川栄人『わたしは食べるのが下手』 小峰書店による）

注1 エキセントリック Ⅱ 普通のものとはひどく変わったさま、風変わりなさま

注2 ヒジャブ Ⅱ イスラム教徒の女性が頭髪をかくすために着用するスカーフのこと

注3 ムスリム Ⅱ イスラム教徒

注4 戒律 Ⅱ 宗教の信仰生活を送る上で守るべき規則や規範

注5 チキって Ⅱ 臆病になつて

Ⅰ——線①「頬杖をついて」とありますが、ここから読み取れる「咲子ちゃん」の様子としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア いやなことを思い出して機嫌が悪い。

イ 窓の外が気になり集中できない。

ウ 周囲の視線をさけて外を向いている。

エ 不安を消そうと顔をさわっている。

オ 退屈な思いをかくしていない。

2——線②「本当はやりたくない。でも、うまくいけば……」とありますが、どういうことですか。次の（ ）にあてはまるかたちにして、Ⅰは十五字以内、Ⅱは二十五字以内でそれぞれ説明しなさい。

（Ⅰ 十五字以内）なんて本当はやりたくないが、うまくいけば（Ⅱ 二十五字以内）こと

(下書き用)

II				なんて本当はやりたくないが、うまいければ	I	
こと						
	20					12

3 — 線③ a「きゃんきゃん言ってる」、b「ひそひそ声が飛び交った」とありますが、ここから読み取れる a「朝野先生」の気持ち、b「教室にいる大多数の生徒たち」の気持ちの組み合わせとして、ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

才	エ	ウ	イ	ア
a	a	a	a	a
混乱	警戒	期待	不満	興奮
b	b	b	b	b
興奮	混乱	警戒 <small>けいかい</small>	期待	不満

4 — 線④ 「咲子ちゃん」について書かれた文としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア いつもぼんやりとしてやる気を感じられず、全体的に無気力に過ごしている。
イ 当たり前のように規則に従っているみんなに距離を感じ、馬鹿にしている。
ウ 他人にどう思われても自分にとって大切なことは曲げたくないと思っている。
エ 大人のことが嫌いで、他人の言動など自分には関係ないと思って生きている。
オ 給食の完食月間に疑問を持ち、「私」を自分の思い通りに動かそうとしている。

5 —線⑤「教室のざわめきが、止まった。」とありますが、なぜですか。その理由としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 咲子ちゃんと「私」が勇気を出して何かを伝えようとしているのを、みんなが理解したから
イ 変わり者の咲子ちゃんに続いてふだんは目立たない「私」が立ち上がったことに、みんなはおどろいたから
ウ ふだんは保健室で給食を食べている「私」が教室で食べようとしたことに、みんなは敬意を表したかったから
エ みんなの好きな給食を食べたくない人が、咲子ちゃんの他にもいることを心外だと思ったから
オ エキセントリックな咲子ちゃんのようにわがままな考えを持つ人がいることに、みんなはあきれたから

6 ⑥にあてはまることばとしてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 空腹感 イ 違和感 ウ 劣等感 エ 徒労感 オ 絶望感

7 この文章には次の一文がぬけています。この一文があてはまるのにふさわしいところを【A】〜【E】の中から一つ選び、記号で書きなさい。

私はそこでようやく、みんなに否定されて傷ついたのは私だけじゃなかったのかも、とか思う。

8 次の文の中で、文章の内容と合っているものをすべて選び、記号で書きなさい。

ア 朝野先生は違反行動に厳しく、個人の気持ちに寄り添わず、くどくどと説教をする先生である。
イ ラマワティちゃんは、戒律のせいで給食に出るものを食べられないことに不満を持って手をあげた。
ウ コツペクんの珍しく真面目な発言は茶化されてしまったが、「私」には助け舟のように感じられた。
エ みんなに注目されていたたまれなくなった「私」は、まわりに迷惑をかけないよう席に着こうとした。
オ この教室にいる多くの生徒たちは、給食は好きなものを好きなだけ食べればよいとわかっている。

5 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

次の文章は、水上勉『土を喰う日々〜わが精進十二カ月〜』（新潮文庫、一九八二年）※単行本『土を喰う日々』（文化出版局、一九七八年）という本を読んだ筆者が、それを元として書いたエッセイの一部分です。

僕が本格的に料理の世界に飛び込んだのは二〇代後半。プロとしてはかなり遅いスタートでした。そしてそこから最初の約五年は、主に和食の世界に携わりました。それまでもアルバイトやダブルワークというかたちで常に飲食の世界に片足を突っ込んでいた僕でしたが、そこで触れていたのは、どちらかというとイタリアンなどの洋食の世界が主でした。なので僕はその時期に初めて、プロの和食の世界を知ったということになります。

それは、門前の小僧的に親から自然と学んだ家庭の和食とは似て非なるものでした。一言で言えば、とにかく洗練されているのです。大根や里芋の皮は、繊維を感じさせないようにとにかく厚く剥き、それを一回下茹でして水に晒し、雑味やアクをすっかり抜いた後、改めてだしに沈めて沸騰させないようにコトコトと煮含めます。そのだしは、たっぷりの鰹節や昆布を、これまた決して煮立たせないよう細心の注意を払って、清澄かつうま味をたっぷり含んだ香り高い味わいに仕立てられたもの。そして葱や茗荷などの薬味は、薄刃の包丁でとにかく薄く刻んだ後、冷水に放ってアクや苦味を抜きます。

これはすごい！と、僕はあつという間に①その世界に心酔しました。ただしその店はあるまで体裁としては「居酒屋」でしたので、そういう②清廉な和食だけではやっていけません。店の評判を高めたのは、むしろ、うま味の強い調味料やリッチな味わいの食材を使って、酔客の舌を一口で満足させるひたすらキャッチーな味わいの料理でした。実際のところ、②そういうのもまた現代の和食の役割です。

僕は当時、その両方に夢中になりました。本当のことを言えば、元々はイタリアンかエスニックがやりたかったのですが、和食は半ば渋々だったのです。しかし、そんな気持ちはあつという間に吹っ飛びました。

そんな時代に、（幸か不幸か）うっかり出会ってしまったのが、水上勉さんの『土を喰う日々』でした。人気小説家であった著者が長野県の田舎で自ら包丁を振るい、日々の食事や来客へのもてなしのために料理を作り続ける日々が一年にわたって描かれたエッセイです。その料理の基礎は、少年時代に禅寺での奉公で習いおぼえた精進料理。

あの独特のすがたをした小芋^{こいも}は、よくたわして土をそぎおとしただけで、茶褐色^{ちやかしよく}のタテジワのよった皮をもっている。ぼくらはこの皮が、多少はのこるぐらいのところをやめる、独特の方法でむいたものだ。〈中略〉

ところが、テレビ番組の板前さんは、包丁を器用につかい、小梅^{こめ}ぐらいの大きさにまでむき、厚い身を捨てて平然としている。これでは芋が泣く。というよりは、つい先ほどまで、雪の下^{うね}の畝^{うね}の穴にいたのだ。冬じゅう芋をあたためて、香りを育てていた^③ 土が泣くだろう。

僕がそれまで無邪気^{むじゃき}に^①信奉^{しんぽう}していた「プロの世界の繊細^{せんさい}な技法」を全否定するかのようなこんな価値観が、この作品の中では繰^く返し語^{かえ}られます。僕にとっては^②パラダイムシフトとでも言いましょうか、ショックキングな読書体験でした。

しかし同時に、僕はこの世界観に対してどこかホツとするような、ある意味「我が意^いを得たり」とでも言いたい^④ 共感も同時に抱^{いだ}いていたのです。

例えば、習いおぼえたばかりの和食の世界では、葱や茗荷^{めいが}だけでなく、大根おろしも水に晒^ひしていました。僕は微妙^{びみょう}にこれに納得^{なご}がいていなかったのです。水に晒した大根おろしからは、その独特の香りや辛味^{からみ}はほとんど失われます。師匠^{ししょう}にそのことを率直^{そつちよく}に言^いうと、「晒すことによって、雑味やエグ味が抜け、甘み^{あま}だけが残って食べやすくなるんだ」という明確な回答が得られました。実際にお客さんからも「家で食べる大根おろしは辛^{から}いばかりでちつともおいしくないけど、ここの大根おろしはおいしくてどれだけでも食べられます」という称賛^{しょうさん}を頂いたこともありました。

皮を分厚く剥^はき丹念^{たんねん}に下ごしらえした野菜を、一種類ずつ微妙に異なるアタリ（和食用語で「味付け」の意味）のだしで煮含めた後、一つの碗^{わん}に盛り合わせる「炊^たき合^あわせ」は、確かに^⑤精緻^{せいせい}な技術の結晶^{けっしょう}でした。しかしそれは子供の頃^{ころ}に祖母がこしらえてくれた、庭の畑で採^とれたての育ちすぎた野菜や裏山の筍^{たけのこ}をまとめてごった煮にする「煮^にしめ」ほど感動的なおいしさではない、ということも（決して口には出しませんでした）内心思っていました。もちろん単なる田舎料理といえはそれまでだし、見た目も含めて料理屋にふさわしいものでもないことも充分^{じゅうぶん}すぎるほど理解してはいましたが。

しかし、すっかりこの本に感化されてしまった僕は、大根おろしを水に晒^ひすことを勝手にやめました。晒さない大根おろしは時間^{かん}を置くと茶色く変色してしまうので、なるべく直前にその場でおろすことにした結果、提供時間^{ていきかん}に遅^{おそ}れが生じることもありま

炊き合わせ用の里芋は相変わらず言いつけ通り分厚く剥いていましたが、その皮をとっておいで素揚げして、八寸（細々した盛り合わせ料理）の隅っこにこっそり、味噌を塗って配置しました。

そのあたりまでは見て見ぬふりをしてくれていた師匠ですが、大根と人參の皮を剥かずに煮物にした時はさすがに、「気持ち悪くありませんがやりすぎである」と釘を刺されました。⑤ 思えばいろいろな偉かったな、師匠。

このエピソードは、僕がとかく影響を受けやすく、なおかつそれを軽率に実行に移す無駄な行動力があるという話ではあります。しかしそれは同時にこの本が、僕でなくても和食に興味があれば誰もがすぐそれを真似したくなる……もう少し直截的に言えば「⑥ しまう」、そんな強い影響力に満ちた一冊であることも物語っているのではないのでしょうか。

著者は九歳から禅寺に入り、その後一六歳からの二年間、東福寺管長だった尾関本孝老師の隠侍として、食事や身の回りの世話などを務めました。本書ではその当時の、主に料理に関する師の様々な教えが繰り返し回想されています。そして著者は、自分の料理は、先達の教えから学んだことを忠実に守っているだけである、ということをもた度度も述べています。

そう書くと、もしかしたらそこに、禅宗の寺院ならではの厳格な教えやしきたり、つらい修行の日々みたいなことを思い浮かべるかもしれませんが、少なくともここで描かれる当時の生活は、どこかのほんとした印象すらあります。

ある時、著者はほうれん草のおひたしを作るのに、赤い根の部分を切り落として捨てていたのを老師に見つかり諭されます。

「いちばん、うまいところを捨ててしまったらあかんがな」

老師は怒るふうでもなくそう言い、

「よう洗うて、ひたしの中へ入れとけ」

と指示するのです。

少年時代の著者は、酒好きの老師のために、食事を求められたら、とりあえず昆布の素揚げに塩を添えて供します。そこから、畑で採れたわずかばかりの野菜を前に、それをどう料理するかを考え始めます。

そんな著者は味付けに「味醂はつかっても、なまなかのことでは酒はつかわない」と言います。ほほう、そこに精進料理のいかなる神髄か？ と興味深く読み進めると、何のことはありません。

本孝老師は酒好きだったから、料理の味つけにつかったりすると叱られた。それがいまもばくにのこっている。

思わず、ずっこけてしまいます。

そんな少年時代を送った著者が人気作家になってから長野の田舎で作る四季折々の料理は、いかにも注6 ストイックな精進料理です。同時に、本孝老師の注7 飄々たる振る舞いをそのまま受け継いだかのように、のほほんと牧歌的でもあります。そして更にそれはある意味、注8 享樂的ですらあるのです。

畑で採れた土の匂い^{にお}がする季節の野菜や、質素な乾物^{かんぶつ}でシンプルに作られるその料理を、著者は「貧しく汚らしいもの^{きたな}に思えるかもしれない」と一応、卑下^{ひげ}しますが、もちろん本心ではそんなことは露^{つゆ}ほども思っていないのは明らかです。今どきの言葉で言うならば「自虐風自慢^{じぎやくふうじまん}」といったところでしょう。著者はただただ自分がうまいと思うものを喰^くらい、またそれで来客をもてなしたいのです。本当にそれだけなのです。

清^{すがすが}々しいまでの注9 エピキュリアン。⑦ 人間、かくありたいものです。

(稲田俊輔『食の本 ある料理人の読書録』集英社による)

- 注1 清廉な Ⅱ 清らかで私欲が無いさま、ここでは、売り上げは気にせず味の本質を追求していること
- 注2 畝 Ⅱ 作物を植え付けるため、畑の土をいく筋も平行に盛り上げた所
- 注3 信奉 Ⅱ 最上のものと信じてあがめ、従うこと
- 注4 パラダイムシフト Ⅱ それまでの価値観ががらりと大きく変わる事
- 注5 精緻な Ⅱ きわめてくわしく細かいさま
- 注6 ストイック Ⅱ 自分の欲望をおさえているさま
- 注7 飄々たる Ⅱ 考えや行動が世間ばなれしていて、つかまえないさま
- 注8 享樂的 Ⅱ 快樂にふけるさま
- 注9 エピキュリアン Ⅱ 美食を愛する人

1 — 線①「その世界」とありますが、それはどのような世界ですか。その説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 親が食事を作る様子を見ているうちに自然と身につけてきた方法で料理をする世界
イ 家族のための地味で素朴な食事を作るのとは違う、上品で美しい料理を提供する世界
ウ 時間や手間をかけることを惜しまずに、プロの料理人が極上の味を追求して料理をする世界
エ 忙しい家庭生活の中で手間をかけずに作る料理とは違い、ゆったりと時間をかけて料理できる世界
オ 現代社会にふさわしく効率性を重視して、都会的で洗練された料理法を実践する世界

2 — 線②「そういうの」とありますが、それはどういうものですか。その説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 美食に慣れた酔客の肥えた舌を喜ばせることによって店の評判を高め、客をたくさん集めることに貢献してくれる料理
イ 高価な調味料とぜいたくな食材を用いることで客の心をつかみ、いつまでも印象に残って忘れられなくさせるような料理
ウ うま味に富んだ調味料や食材を用いることにより生み出される、食べた客がみな驚くような個性的で話題性の高い料理
エ 調味料や食材の強い味わいを前面に出す味付けにより、酒席で鈍った舌でも食べた瞬間に「おいしい」と感じられるような料理
オ 本来の和食の繊細な味わいとは違う強烈で現代的な味付けで、酒席での話題にのぼったり写真で見映えがしたりするような料理

3 — 線③「土が泣くだろう」とありますが、どういうことですか。その説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 小芋を育ててきた土には、雑味を取り除いた料理を作りたいという板前を理解することなどできないということ
イ 小芋の身を厚くむき食べられるところを捨ててしまうのは、小芋を育ててきた土を軽んじているということ
ウ 皮を残さず小梅ぐらいの大きさまでむいてしまうと、小芋から土の香りを感じられなくなること
エ せっかく土により育み守られてきた小芋の命を無駄にしてしまうのは、もったいなく経済的ではないということ
オ 調理の際に小芋の皮を厚くむいてしまうと、冬じゅう小芋を大切にしてきた土のがんばりが無駄になるということ

4——線④「共感も同時に抱いていたのです」とありますが、それはなぜですか。次の（ ）にあてはまるかたちにして、四十字以内で書きなさい。その際、「素材」ということばを必ず用いること。

「僕」は内心では（四十字以内）と感じていたから

(下書き用)

[illegible]

5 — 線⑤「思えばいろいろ偉かったな、師匠。」とありますが、ここから読み取れる感謝の気持ちは、どのようなことに対するものだったと考えられますか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア時にやさしく、時に厳しい見事な指導により、わがままだった自分を何とか一人前の料理人に育ててくれたこと
イ遠くからそと見守り、自分がまちがった道に進みそうになった時にはすかさず注意をあたえてくれたこと
ウ何も知らなかった自分に一から料理を教え、プロの和食の世界のルールを身につけさせてくれたこと

エ言いつけを聞かずに勝手なことをしていたのに、気持ち尊重して自分に自由な取り組みをさせてくれたこと、
才和食の世界のあれこれを教え、それを元に発展的な料理に挑戦した自分をはげましてくれたこと

6

⑥ にあてはまることばとしてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア かぶれて イ ひびいて ウ のめって エ かじって オ とろけて

7 — 線⑦ 「人間、かくありたいものです。」とありますが、ここからどのような気持ちが読み取れますか。ふさわしいものを次の中から

一つ選び、記号で書きなさい。

ア 他人からの評価は全く気にせず、自分自身の感性を信じてありのままの自然の味を活かした料理を楽しんでいる「著者」の暮らしはすばらしい、という感嘆

イ 気取った食材などは使わずとも、田舎の新鮮な食材を豊富に使った料理を日々味わうことのできる豊かな暮らしを、私たちは見習うべきだ、という反省

ウ 自分の人生を卑下しているようでありながら、田舎でのんびりと料理をして気ままに暮らしていることを実はうらやましく思っている、というねたみ

エ ひかえめな味付けで素材を活かす精進料理のおいしさを追求し、ひたすら料理に明け暮れる自制的な生き方こそが、料理家の目指すべき道だ、という気づき

オ マイペースでユーモラスな師匠の振る舞いを受け継いだかのようにのほほんと料理をすることのできる田舎暮らしは、真に人間らしいものだ、というさとり

(問題はこれで終わりです)

